

2025年度 長岡崇徳大学 一般選抜一期試験問題

国語〔現代の国語〕と「言語文化（近代以降の文章）」

第1問 次の文章を読んで各問に答えなさい。

とある速読本によると、その速読法で得られる「理解率」は、内容の七〇％程度で、これはゆっくり読んだ場合とさほど変わらないとのことである。理解率というが、どういう形で測定されているのか、^①ギモンの残るところだが、こうした単純な数字は「まやかし」である。速読した場合の「理解率七〇％」と、スロー・リーディングによる「理解率七〇％」は、同じ七〇％でも、まったく意味が違うからである。

スロー・リーディングの場合、文脈を順に^②辿っていくわけだから、「AはBである」という内容を、「AはBでない」と逆に読み違えるような、決定的な誤読の可能性は少ない。しかし、速読の場合は、単語だけをザッと拾って、助詞や助動詞を^③ケイシするため、頭の中で自分で勝手に単語を結びつけてしまい、肯定か否定かという最も重要な内容の理解に失敗してしまう危険性がある。

外国人と英語で会話をする場合を考えてみよう。相手が非常に早口の場合、あるいは、周囲が非常にうるさいようなとき、私たちは、なかなか相手の言葉をすべて聴き取ることができない。どうするか？ 仕方がないから、聴き取れた単語を頭の中で適当につなぎ合わせてみて、なんとか意味を想像してみる。しかし、その場合、「I am」か「I am not」か、その「not」一つが聴き取れているかどうかで、内容はがらりと変わってしまう。

速読の恐さは、^Bこれと同じである。たとえば、全体として七〇％は理解していたとしても、その曖昧な三〇％の部分に決定的な間違いが入っている可能性があるのだ。

上記の速読法の本には、そうした誤読を避けるために、「理解が^④曖昧なところは、もう一度さかのぼって読み返す」と書かれている。もちろん、そうすべきだろうが、速読とは、そういう二度手間を^⑤ゼンテイとしているのだろうか？ それでは、あまりありがたがられないだろう。

第一、理解が曖昧な箇所が、正確にすぐに分かるとも限らない。読み返すときには、^⑥結局は文脈に沿って、スロー・リーディングするしかないのである。

^Cウマイ話には、大抵、裏がある。もし、本当に速読が誰にでも身につけられる有効な読書の方法だったなら、それが標準的な本の読み方として、もっと広く一般に定着していたはずではあるまいか？ 私たちの読書の歴史は、結局、速読の有効性をあまり信頼してこなかったのである。

（平野啓一郎『本の読み方 スロー・リーディングの実践』による）

問一 傍線部①～⑥のカタカナは漢字に直して、また、漢字はその読み仮名を解答欄に書きなさい。

問二 傍線部A「まやかし」の意味を解答欄に書きなさい。

問三 傍線部B「これ」が指し示す内容を文脈に沿って解答欄に書きなさい。

問四 傍線部C「ウマイ話には、大抵、裏がある」について、速読法に即して「裏がある」ことの実例を逆説的な表現で具体的に表している七十字以上の一文を探し出し、その最初の五文字を解答欄に書きなさい（句読点を含む）。

問五 本文の内容と合致するものを次の選択肢の中から一つ選び、解答欄に書きなさい。

- ア 長い読書の歴史の中では、実は速読法はあまり定着せず、人々の信頼を勝ち取るまではいかなかったというのが事実である。
- イ 速読法の理解率は厳密な方法によれば七〇%とされているが、それに頼り切ることに内容は把握という点から言えば、問題がある。
- ウ 外国人と英語で会話をする場合、聴き取れた単語を頭の中で適当につなぎ合わせてみるだけでは、三〇%の理解にとどまってしまう。
- エ 速読法であっても、スロー・リーディングの手法とうまく組み合わせる活用すれば、それなりの効果は見込める。

第2問 次の文章を読んで各問に答えなさい。

或る日曜日の午後であったと思う、僕は姉と親戚へ行った。その帰り路に、姉が何気ない風に云った。

「節ちゃん、あたしが居なくなっても、さびしくない？」

僕はだまっていた。

「お父様だって、お困りになるわね」

しばらく間を置いて、姉は思い切ったように、言葉をつづけた。

「あたし、節ちゃんに相談があるの。――^{くげぬま}鶴沼の、桂おばさま、ね、知ってるでしよう？」

「知ってるよ」

突然のことで、姉が何を云おうとするのか、僕には分からなかった。桂おばさまというのは、死んだ母の遠縁に当たる、母より三つ四つ若い、美しい人であった。前にも云ったが、母が返子で^①リョウヨウしている頃、つき切りに看護をして呉れた人だ。結婚して二年ほどで、夫に死に別れた、ということはその頃から聞いていた。

「^A桂さんに、――あたしの代わりに、家へ来ていただいたらと思ったの。お父様に話したら、節雄が好ければ、つておっしゃるのよ」

ドキンとした。みんな、自分を可愛がってくれる人は行ってしまつて、お体裁に、^{ていさい}代わりの人を置いてゆこうとしている。――そんな気もした。

「僕、嫌だ」

そういえば、桂さんはこの頃、二三度家へ遊びに来ている。自分には何も云わず、みんなそんな事進行させていたに違いない、――そんな風にも想像した。

「このこと、あんまり突然だから、あなたには^②呑み込めないかもしれないけど、あたしがお嫁に行ってしまったら、お父様だって随分お困りになるし……」

「お父様は勝手に旅行してればいいさ」

僕は^Bすげなく云い切った。姉は淋しそうに、そのまま黙った。

一周忌が近づくとつれ、姉の支度や親戚の出入りで、父も忙しそうであった。誰かしら人が来ていて、家は^③賑やかだった。

「お母さんも、きつと喜んでいらっしやいますわ」

人々は、申し合わせたようにそういった。

晴れやかな姉の笑い声を聞く時、僕はたった一人の姉を奪われる感じを、もっとも激しく味わった。

「姉弟なんて、つまらないもんだね」

二三の友達に、僕はマセたことを云ってみたりした。

「そうさ、^C兄弟は（ ）の始まり、って云うもの」

そんなことを教えてくれる友達があった。

あれ以来、ひょいッと、桂さんのことを思い出すようになった。桂さんは、もの静かな、にこやかな人で、桂さんに就て、僕は何の悪意も持っているのではなかった。

一周忌の前夜、坊さんが来て経をあげた。親戚の人が帰ってしまうと、父の書齋に親子三人が、久しぶりに卓を囲んでいた。

父が姉に云った。

「どうだ、あの着物、気に入ったか」

「とても。——すばらしいわ」

「ふーん」

父はニコニコした。先日旅行に出た時、京都で注文したのが、今朝届いて来たのだ。

「節雄、その戸棚からブランデーを取って呉れ。——信子は胡桃を」

僕はこれと同じの細長いブランデーの^④瓶を、そして姉は胡桃を、卓の上に置いた。

「一年なんて、たつてしまえば早いもんだ。——お父さんも、もう旅行をしないで済む

ように、会社へ頼んで来た。これで、お姉さんが嫁に行くと、また自分、一寸淋しいな」

父がやさしく僕に云った。父の顔が、^⑤老けて見えた。姉はブランデーを注いだ。

「しかし、すぐまた馴れるさ」

父はグラスを口にふくんだ。

どうしたはずみか、桂さんのおもかげが、その時僕の眼に浮かんで来た。僕は一寸あわてた。そして困って、胡桃を一つ摘むと、クラッカーに挟んで片手で握りしめた。すると、カチンと、快い音がして、胡桃は二つに綺麗に割れた。

思いがけない、胸のすくような^⑥カンショクであった。

その時、僕は云った。

「お父さん。僕、桂さんに家へ来て貰いたいんだけど……」

「——という訳さ。」

勿論、桂さんは第二の母として、亡い母以上に僕を愛して呉れた。

もう父も桂さんも、この世には居ないが、父のD命日には、こうして胡桃を割ることにしているのだ」

なるほど、絵かきは、カチンと、巧みに胡桃を割り、その音をしみじみ懐かしむ。

私の割る音とは、どうしても違うのだ。

(永井龍男「胡桃割り」による)

問一 傍線部①～⑥のカタカナは漢字に直して、また、漢字はその読み仮名を解答欄に書きなさい。

問二 傍線部Aの姉の発言は、桂さんにどうしてもらおうことを示唆しているのか。その内容を具体的に解答欄に書きなさい。

問三 傍線部B「すげなく」の意味を解答欄に書きなさい。

問四 傍線部Cは「最も身近で仲の良い兄弟でも、成長して大人になれば、結婚や利害関係などによって、しだいに疎遠となる」という意味のことわざになる。それを踏まえて()に入る適切な漢字二文字を解答欄に書きなさい。

問五 傍線部D「命日」の意味を解答欄に書きなさい。

問六 本文の内容と合致するものを次の選択肢の中から一つ選び、解答欄に書きなさい。

ア 絵かきは、母の死が素直に受け入れられない中で、自分だけ結婚して家を出ていこうとする姉に対して身勝手だというやりきれない思いを抱いていた。

イ 絵かきは、母の看護を献身的にしてくれた桂さんに対して、どこか馴染めず、その後も消極的な拒絶感を成人するまでずっと抱いていた。

ウ 絵かきは、母の一周忌を終えたあと、結婚しようとする姉に対して、父も周囲の人も反対しようとしないうちに苛立ちを覚えていた。

エ 絵かきは、父の命日に胡桃を割ることにかつての自分を取り巻く生活史を重ね、胡桃割りに込められた自分の当時の気持ちを懐かしく思い出していた。

第3問 次のA、Bの四字の言葉について、それぞれの読みと意味を解答欄に書きなさい。また、C、Dのことわざについて、それぞれの意味を解答欄に書きなさい。Eについては、正しい作家名を解答欄に書きなさい。

A 一期一会

B 厚顔無恥

C 情けは人の為ならず

D 三つ子の魂百まで

E 日本人初のノーベル文学賞を受賞した大正から昭和時代に活躍した文豪。日本の叙情的
美の世界を築いた「雪国」や「古都」が有名で、その他、旧制一高時代に伊豆に旅行した
体験をもとに書いた「伊豆の踊子」は青春小説の代表作として名を馳せた。